

---

# 彼岸花

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

彼岸花

### 【Nコード】

N3028A

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

かつて王を暗殺しようとした男がいた。彼はその為に何を思い、何を生きたのか。司馬遷の史記、刺客列伝からの話です。

## 第一話

彼岸花

その時中国は大きなうねりの中にあつた。

長い戦いの時が終わり時代は統一へと向かつていた。当時中国において最も隆盛を誇っていたのは秦であつた。

この時の秦王は政、後の始皇帝である。

彼は出生の時から色々と噂があつた。彼の父親については二つの説がある。

まずは莊襄王であるという説。そして彼の妻を以前遊女として側に置いていた彼の後見人呂不韋、司馬遷は史記において二つの説を併記している。一説によると彼は目が青く、髭が赤かつたという。

鼻は高く目は切れ長、そして胸は大きく突き出ていた。漢民族のものではない容姿も窺えるところから彼は秦の血を引いていたのではないか、という説もある。だが呂にしる彼の母にしるその可能性もないわけではない。やはり真相は謎のままである。

これの真相はわからない。だが彼が幼い頃趙の人質として辛い少年時代を送つたことは事実であつた。そしてそれが彼の人間性を形成する一旦となつた。

彼は秦に戻り十三歳で王となつた。頭はいいが醒めており、そして人を決して信用しなかつた。そんな彼が性悪説に基づく法家の思想に魅せられるのも当然であつただろうか。

彼は法家、とりわけ韓非を重用した。彼は敵国韓の王族であつたがそれに構わず彼を使った。だが決して信用はせず彼を牢に置いた。彼は後にかつての友人であつた同じく法家の李斯により暗殺される。韓非の才を知る彼は自らの地位を守る暗殺したのだ。彼は恨みを飲んで死んだ。

だがそれでも秦王の考えは変わらなかつた。彼は法家の信念のもと国を治め各国を次々と併吞していった。そんな彼の前に各国は為

す術もなかった。

「今は秦か」

中原に衛という国があった。そこに一人の男がいた。その男は今草原で一人寝そべっていた。

旅の服装をしている。身なりは質素だがその物腰は決して卑しいものではない。

腰に一振りの剣がある。その質素で旅に汚れた身なりからは不釣り合いな程立派で大きな剣であった。

その剣だけで彼が普通の者ではないことがわかった。彼の名は荊軻という。この国の士大夫の身分にある者であった。

彼は今しがた祖国における官を辞したばかりであった。主君に進言したが受け入れられなかったからだ。

「どうするかな、これから」

彼は今後の身の振り方について考えていた。だが中々結論は出なかった。

寝転がりながらふと辺りを見回す。すると側に花が咲いていた。

「おや」

見ると赤い。茎は細いが花は見事に咲き誇っている。

「彼岸花か」

彼はその花を見て微笑んだ。花は風に煽られ北に向いている。

「御前は俺に北に行つて欲しいのか」

花に問いかけた。だが花は当然のことながら答えない。それは彼もわかっていた。

「よし」

彼はそれを受けて微笑んだ。

「では北に行くとしよう」

そう言つとゆっくりと立ち上がった。

そしてそのまま北に向かつて歩いて言った。道中色々とあり、時には喧嘩を売られることもあったが彼はそれを相手にはしなかった。笑われようとも気にしなかった。

やがて燕に辿り着いた。当時最も北にある国であった。凍てつく様な寒さが支配していた。

彼はここに身を落ち着けた。だがこれといって何をするわけでもなく書や剣、そして酒を楽しみ遊侠の徒達と交わった。そして無為に日々を過ごしていた。

だが世の中は無為には動いてはいなかった。秦の侵攻は止まるどころを知らず各国は次々に滅ぼされその軍門に下っていった。

燕もまた例外ではなかった。北の果てにあるこの国にも秦の軍が迫っていた。

これに危機を覚えぬ者はいなかった。そして秦王を恐れぬ者もいなかった。彼はまさに餓えた虎の如く燕を狙っていたからだ。

その彼を憎む者がこの国にいた。太子である丹だ。

彼はかつて趙で人質となっていた。そしてそこで幼い時の秦王と会っていたのだ。

彼等は人質同士ということもあり親しい関係にあった。そしてよく遊んだ。幼馴染みであったのだ。

丹は後に秦に人質として向かった。この時彼は古い友人と再会することに喜びを感じていた。

だがそれは見事に裏切られた。再会した秦王は冷酷な専制君主となっており彼を冷たく扱ったのだ。

その仕打ちに丹は驚き、そして怒った。彼は胸に激しい憤りを覚え秦から去った。そして彼に復讐する機会を狙っていたのである。

その彼のもとに一人の男がやって来た。秦の將軍である樊於期が来たのだ。彼は秦王を諫めたところ聞き入れられずその一族を皆殺しにされたのだ。

この時彼は友人の家において難を逃れた。そして彼への復讐を誓い燕に流れてきたのだ。

彼を受け入れるかどうか、燕は議論を重ねた。そして遂に丹が彼を匿うことになったのだ。

秦の襲来を恐れる声が多かった。だが彼はあくまで樊を匿うこと

にしたのである。

しかし秦の怒りを買ったことは必定であった。秦王は恨みを忘れな  
い。かつて彼に反逆を企てた母の愛人は車裂きにされ一族郎党その  
首を晒されていた。彼は非常に酷薄な人物でもあったのだ。

その彼が燕に兵を向けたらどうなるか、答えは明白であった。燕  
の者は皆それを心から恐れていた。

だが丹には考えがあった。それは何か。

「要は秦王さえいなければそれでよいのだ」

彼はそう考えていた。そしてそこから結論を導き出した。

それは暗殺であった。秦王に刺客を送る、彼の結論はそれであっ  
た。

しかしそれは容易ではない。人を信じぬ彼は常に身の周りの警護  
を怠らなかつた。宮殿には武装した兵士達が詰め、彼の側には剣を  
持つて入ることはできなかつた。彼は用心に用心を重ねていたのだ。  
その彼を討つことは到底不可能に思えた。だが彼はそれをあくま  
でやろうと考えていた。

「問題は誰を刺客に送るかだ」

丹は常にそのことばかり考えていた。だがそれが可能な者なぞ天  
下広しと言えど見つからなかつた。

幾ら探しても見つかりはしない、困った彼は燕において賢人と評  
判をとる田光という老人に相談することにした。

彼は田光を自宅に招いた。そして彼をその中の奥へ案内した。

（これは只事ではないな）

田光は案内されるうちにそれに気付いた。見れば進む道は次第に  
暗くなり案内する者も丹一人となっていた。そして前を進む彼の足  
取りが妙に速かつたのだ。

やがて二人は暗い部屋に入った。昼だというのにその部屋は暗く  
僅かな蠟燭の光だけが部屋を照らしていた。

「こちらです」

丹はようやく振り向いて田光に声をかけた。その顔は暗く、そし

て何らや無気味な雰囲気を漂わせていた。

田光はその顔を見て覚悟を決めた。だがそれは顔には出さなかった。

「はい」

何事も知らない素振りで見送られた。そして部屋の中央に置かれていく席に向かった。

二人は席に着いた。互いに顔を見合わせる。

「本日先生に来て頂いたのは他でもありません」

まず丹が口を開いた。その顔が暗闇の中の蠟燭の火に照らし出される。

「国事について御教え頂きたいのです」

「国事ですか」

彼はそれを聞き密かに唾を飲み込んだ。おそらく太子は何やら恐ろしい計画を立てている、そう感じていた。

（まさか謀反か）

まずはそれについて考えた。だが今彼の政敵はこれと聞いていない。このままいけば彼が次の燕王になるのは確実であった。

（では何だ）

彼は考えた。重臣の肅清か。しかしこれもない。彼といがみ合っている燕の臣もいないわけではなかったがそれ程までに敵対してはいなかった。

（これも違うな）

どうやら国内のことではないらしい。すると外か。

「秦のことですが」

丹は言った。

（やはりな）

彼の予想は当たった。だがそれはおおまかなことであり細かなことまではこの時点では考えてはいなかった。それについて考えようとしているところであった。

だが丹はそれよりも前に彼に対して言った。

「今秦は我が国に迫っております。これについてどうお考えですか」  
「秦ですか」

彼はそれまでの思考を一旦打ち切った。そして秦について考えを巡らせた。

(秦………)

その強大さは知らぬ筈がなかった。そしてその野心も。今秦は中国統一に向けて大きく動いていたのだ。

秦を止めるのはおそらく不可能であろう。田光はそう見ていた。

「殿下、御言葉ながら今の秦は」

「それはわかつております」

丹はそれに対して反論した。

「ですが何としても防がなければなりません。あの秦王を除かなければならないのです」

「秦王をですか」

「はい」

丹は答えた。その目には炎が宿っていた。

「む」

田光はその炎に気付いた。それは憎悪に燃える炎であった。

(これはまずいかも知れぬ)

その憎悪の炎を見て思った。それは極めて危険な光であった。

今彼はあきらかに私怨で語っていた。その炎が何よりの証拠である。

そうとなれば彼は決して諦めまい。ましてや今その私怨に気付いていない。彼はあくまで自分が国の為にと動いていると確信しているのだ。

(これも運命か)

彼は内心大きく息を吐いた。

(それでは仕方ない)

諦めた。諦観を胸に抱きそれから丹に語った。

彼岸花

## 第二話

「そして殿下はどの様にお考えなのか」

「私の考えですか」

丹は問われ息を飲んだ。だがその飲んだ息を吐き出し語った。

「刺客を送ろうと考えております」

「刺客を」

「はい。かつての襄政の様な優れた刺客をです。先生ならそうした者をご存知だと思つたのですが」

「私が」

「はい。誰か知っておられますか」

「そうですね」

彼は考えながらこの計画がほぼ確実に失敗に終わるだろうと思つていた。秦王は用心深い人物として知られている。そして頭が切れる。おそらく相当の者を差し向けても失敗するであろう。そうならば後の燕の運命も決まる。

（それもまた運命なのか）

彼は一瞬だが瞑目した。だが丹はそれには気付かなかつた。

「一人心当たりがあります」

「それは」

それを聞いた丹は思わず身を乗り出した。

「荊軻という者です」

「荊軻」

丹はその者を知らなかつた。

「はじめて聞く名ですが一体どういう者ですか」

「はい」

田光は話しはじめた。それを聞き終えた丹は苦い顔をしていた。

「お聞きしたところ大した者ではなさそうですが」

「いえ」

田光はここで首を横に振った。

「只の遊侠の徒ではありませんせぬ」

「しかし今のお話を聞くかぎりには」

「確かにそう思われましよう。ですがそれだけではありません」

「といたしますと」

「あの御仁は実は智も勇も備えております」

「本当ですか!？」

「はい。その剣技はまるで流星の如く、その知識はまるで書庫の如くです。おそらくこの燕でもあれ程の方はおられないでしょう」

「しかしそれ程の人物が何故埋もれていたのか」

「名を隠しておられていたのです」

田光は答えた。

「一度故国で己が考えを述べて受け入れられず、以後は身を隠していたのです。中にはそうした隠者もおります」

「ふうむ」

丹はそれを聞き腕を組んで考え込んだ。

「興味がありますかな」

「はい」

彼は答えた。

「一度お会いしたいですな」

「わかりました」

彼はそれを聞き大きく頷いた。

「では今から彼のもとに参ります」

「今からですか」

「思い立ったが吉日です。今動かなくて何時動きましよう」

「わかりました」

丹はそれを認めた。そして家を出、馬車に乗り込んだ田光に対して言った。

「では宜しく願います」

「わかりました、必ずや話をして参りましょう」  
「お願いします」

丹はそう頼みながら田光に顔を近づけてきた。  
「そしてこれは重要な話ですが」

「はい」

田光もそれに合わせて顔を近づけさせた。

「この度の話、国家のの大事にございます。決して他言なさりませぬよう」

それを聞いた田光の顔色が一瞬変わった。だが彼はすぐにそれを消した。

「御心配無用、それはわかっております」

「ではお願いします」

彼にとっては些細な一言であった。だがそれは田光にとっては極めて重い言葉であった。だがそれを感じているのは田光だけであった。

彼は荊軻の家に向かった。そして街中の貧しい造りの一軒家に向かった。

「荊軻殿」

彼は玄関で名を呼んだ。

「おられますかな」

程無くして玄関の向こうから声がしてきた。

「はい」

そしてすぐに彼が姿を現わしてきた。

「おお、先生でしたか」

荊軻は彼の姿を認めると微笑んだ。

「お久し振りです、まあどうぞ」

そして彼を家の中に招く。

家の中はこれといって何もなかった。極めて質素である。だが大きく見事な剣が一振りと多くの書物が置かれていた。

「また読書に励んでおられていましたな」

「まあほんの暇潰しです」

そう言いながらも読まれている書はどれも名著の誉れ高いものであった。

「大したものではございません」

「いやいや」

田光はそれを否定した。荊軻は書を片付けながら彼に対して言った。

「すぐに酒の用意をしますので」

「いや、今日は酒ではござらぬ」

田光は彼に言った。

「では何でしょうか」

「実はな」

田光の顔が深刻なものになった。

「先程私は太子とお話をしておりました」

「太子と」

「はい。これからの燕の行く末について話をしました」

「また厄介な話ですな」

燕の未来は彼にも見えていた、その時になったら身を隠して難を逃れるつもりであった。

「それで秦についても話をしました」

「秦について」

「はい。あの国をどうするべきかと。太子はいたく悩んでおられました」

「そうですね」

荊軻は腕を組み考えながら答えた。彼もあの国をどうするべきか考えあぐねていたのだ。

「最早秦の勢力はこの中国を覆わん程にまでなっております、しかしそれに対して我が国はあまりにも脆弱です」

「はい」

それは覆すことのできない真実であった。秦の力はあまりにも強

かった。それに比して燕の力は弱かった。

「太子は秦と燕は決して両立できないと言っておられました」

「それは私も同意です」

だがその根幹が違った。彼は燕が秦に滅ぼされると考えていたのだ。だがそれは口には出さなかった。

「そうならばどうやってあの国を倒すかです。一番よいのは各国と同盟を結び秦にあたることです」

「それが一番でしょうか」

しかしそれでも効果は期待できなかった。秦の力はそれ程にまで強くなっていたのだ。

「私が若ければ各国を説き連合を組むのですがもう歳です」

「残念です」

「そこで私は貴方を太子に推挙することにしました」

「私を」

「はい」

田光は頷いた。

「今燕には貴方程の人材はおりませぬ故。それで貴殿を推挙致しました」

「何と」

荊軻はそれを聞いて言葉を失った。まさかこのようなことになるとは夢にも思わなかったからだ。

(うつむ)

彼は心の中で思った。

(私は燕の者ではない。ただ流れ着いただけだ。そのようなことをする仁義はない。だが)

田光を見た。

(しかし先生にはいつも目をかけて頂いている。それを忘れたことは一度もない。土は己を知る者の為に動くという)

彼はここで侠の心を思い出した。それに従わないわけにはいかなかった。

「わかりました」

彼は答えた。

「先生のご期待に添えましょう」

そう言つて頭を垂れた。

「引き受けて下さいますか」

「はい、この命燕に捧げましょう」

「命もですか」

「はい」

荊軻は顔を上げた。その顔は真剣なものであった。

「これでもう思い残すことはない」

笑つた。だが何処か寂しげな笑みであった。

「先生、その御言葉は」

「荊軻殿」

田光は荊軻に言つた。

「最後に太子にお伝えしたいことがあるのですが」

「最後などと」

荊軻はその言葉を笑い飛ばそうとした。だがそれはできなかつた。

田光の目は真剣そのものであったからだ。

「宜しいでしょうか」

「はい」

そう答えざるをえなかつた。

「有り難い」

田光はそれを受けて笑つた。それから言つた。

「優れた者は事を為すに当たつて人に疑いを抱かせないといひます」

「はい」

それはよく言われている言葉であつた。荊軻はその言葉に対して頷いた。

「私はここに来る時殿下に言われました。『決して他言せぬように』と」

だがこれは常に言われる言葉である。少なくとも荊軻はそう思つ

た。だが彼は違っていた。

「これは私を疑っておられるということですよ」

「いや、それは考え過ぎでしょう」

「いえ」

田光はそれには首を横に振った。

「違います。以前の私はそうではありませんでしたから」

「たまたまです。おそらく殿下も国の大事故そう申されたのでしよう」

「それでもです」

だが田光は結局納得しなかった。

「私も老いました。人に疑いを抱かせるようではもう終わりですよ」

「それは少し」

「荊軻殿」

彼は強い声で荊軻に対して言った。

「もうお話することはありません。私は自分の考えを変えるつもりはありません」

「それでは……」

「はい」

田光は答えた。

「これでお別れです」

彼はそう言うのと懐から剣を取り出した。そして呆然とする荊軻が止めるのより早くそれを首に突き刺した。

「せ、先生！」

ようやく動けるようになった彼は田光に近寄った。だが彼は既に血の海の中にいた。

「最後に殿下にお伝え下さい」

彼はその中で荊軻に対して最後の願いを託した。

「これで秘密は守れましたと……」

そして事切れた。後には呆然とする荊軻だけが残った。

### 第三話

彼は田光の言葉に従い丹の屋敷に向かった。程無くして丹が姿を現わした。

（ふむ）

見たところあまり風格はない。背もやや小柄で身体も痩せていた。そして顔立ちも一国の太子にしては品がないように感じられた。

（見たところあまり大した人物ではないな）

心の中ではそう思ったが当然口には出さない。丹は彼を奥の部屋に案内した。

（暗いな）

その廊下は暗い。どうやら彼が考えていることもこれと同じ様に暗いのだろうか。そう考えた。

部屋に入る。やはりその中也暗かった。

「こちらです」

丹に勧められ中に入った。そこには蠟燭の炎だけがあった。

「殿下、はじめまして。荊軻でございます」

彼はここでようやく己の名を名乗った。

「はい、御名前は田光先生よりお聞きしております」

丹はそれを受けて言った。

「是非御力をお貸し下さい、燕の為に」

「わかりました」

荊軻は答えた。

「この命、今から燕に捧げましょう」

「お願いできますか」

「はい」

彼は答えた。

「この言葉に偽りはありませぬ」

「それは有り難い。ところで先生はまだですか」

丹は何気なくそう尋ねた。

「先生ですか」

その時荊軻の顔が曇った。

「はい。遅れて来られるのでしょうか」

「いえ」

荊軻はそれに対して首を横に振った。

「ここには来られませぬ」

「どうしてですか？」

「殿下」

彼は言った。

「先生の最後の御言葉です。『秘密は守りました』と」

「最後の言葉とは」

それを聞いた丹の顔が暗転した。

「はい、先生は殿下の他言せぬようにとの御言葉を受け自害なされました。秘密を守る為にです」

「なっ！」

それを聞いた丹は思わず身を乗り出した。

「荊軻殿、それはまことですか!？」

そして震える声で問うた。

「残念ながら」

荊軻は瞑目して答えた。

「私の家で自害為されました」

「何ということだ……」

丹の顔は暗闇の中でもわかる程蒼白となっていた。

「その様なつもりでお話したのではなかったのに……」

「惜しいお方でした。しかし先生は私に後を託されました」

「そうですか」

彼は青い顔のまま頷いた。

「先程も言いましたがこの命、燕に預けました。何なりと御申し下  
さい」

「わかりました」

丹はそれを受けて頷いた。

「先生が貴方を推挙されたということは天はまだ燕を見捨てていないということでしょう。それならばお願いします」

「はい」

荊軻は答えた。

「何なりと御申し下さい」

「ええ」

丹はそれを受けて口を開いた。

「秦のことは既にお聞きだと思えます」

「はい」

その為に来たのだから当然であった。

「既に趙の滅亡も時間の問題です。すぐにこの燕にも迫って参りましょう」

「でしような。今の秦を見ていると」

「燕には残念なことに秦に当たる力はありません。他の国もです」

「はい、秦の力はあまりにも強大です」

「各国と連合しても通用するかどうか。甚だ疑問と言わざるを得ません」

「御言葉ですが私もそう思います」

荊軻もそれに同意した。

「今の秦の力は極めて強大です。どう考えても倒すのは不可能です」

「はい」

丹はそれに頷いた。

「ですが一つだけ方法があります」

「方法が」

「だが荊軻にはそれが何かわからなかった。」

（そんなものがあるのだろうか）  
普通に戦おうが外交を駆使しようが無駄だと思われた。彼にはやはりわからなかった。

「今の秦はどの様な体制ですか」

「秦の体制」

「そうですね。秦王に権力が集中しておりますな」

「ええ」

それが秦の目指した体制であった。貴族や王族の権力を弱体化させ王に集中させる。所謂中央集権体制であった。秦王は自分の下に権力を集中させ、全てを決裁する体制を目指していたのである。

「最早秦で彼に逆らう者はありません」

「その様ですね」

それは荊軻も知っていた。だが彼はそれには特に思うところはなかった。

「しかし彼がいなくなったらどうなるでしょう」

「秦王がいなくなったら」

「そうですね、秦の全てを握る者がいなくなるのです。そうすれば必ずや秦の内部で動きがあらましよう」

「それはそうですね」

実際に後彼が天下を統一した後で崩御した途端に大規模な反乱が置き秦は滅亡している。陳勝呉広の乱から項羽と劉邦の旗揚げである。

「秦は今秦王に従っております。その彼がいなくなると必ずや内で騒動が起こりましよう」

そうした意味で丹の読みは当たっていた。だが彼の結論はその行動が問題であった。

「それで私はあることを決意したのです」

「あることは」

荊軻は問うた。

「暗殺です」

丹は暗い笑みを浮かべて言った。

「暗殺!？」

「そうですね。田光先生からお聞きしていませんでしたか」

「それは」

今彼は気付いた。あの時の田光の唯ならぬ様子を。彼は言葉で言わずその様子で彼にそれを伝えていたのだと。

(そういうことか)

荆軻はそれをようやく察した。その時彼は自分の命を燕に預けるとまで言っている。それを翻すことは彼の義侠心が許さなかった。

(よし)

彼は決心した。だがまだそれを口には出さなかった。まずは丹の心を確かめることにした。

「お待ち下さい」

丹を止めた。

「私は先生に知恵を貸すようにと言われてここに参上したのです」「それは知っています」

丹の声が強いものになった。

「しかし最早これしか方法はないのです」

「いや、それはどうでしょう」

ある程度わかったがまだ試すことにした。

「もっとよくお考え下さい。必ず他に何か方法がある筈です」

「それも考えました。しかしやはりありませんでした」

「そうなのですか」

「はい」

(やるしかないようだな)

荆軻は丹の様子を見て覚悟を決めた。だがそれもまだ口には出さない。

「それは不可能です」

「何故ですか？」

丹は問うた。

「秦王の宮殿には無数の武装した兵士達がいるでしょう。彼等は秦の兵の中でも精鋭揃いです」

「それはわかっています」

「そのうえ彼は用心深い。側の者には帯剣すら許してはいないそうです」

「それもわかっています」

丹はあくまで食い下がってくる。

「ですが私にも考えがあります」

「何でしょうか」

荆軻は尋ねてみた。

「秦王が財宝を好むのは御存知でしょうか」

「ええ」

彼は見事な宮殿を建てさせそこに天下の財宝を集めている。人を信じることのない彼はそこに心を満たすものを求めているのである。「山の様な貢ぎ物を差し出せば必ず出て来るでしょう。そこを討つのです」

「そこをですか」

「はい、既にその財宝は用意してあります。私に出来ることならば何でも致しましょう」

「ふむ」

荆軻はここで目を閉じた。

「燕の命運を私に委ねられるというのですな」

「はい」

丹は答えた。

「私の命も全て貴方に捧げましょう。今私は貴方に全てを託します」  
「わかりました」

ここに至りようやく彼はそれを了承した。

「この仕事、喜んで引き受けましょう」

「まことですか!？」

丹はその言葉に思わず顔をあげた。

「はい。この荆軻嘘は申しません」

彼は強い口調でそう言いきった。

「必ずや秦王を暗殺致しましょう。その為にはこの荆軻全てを捧げ

ます」

「有り難い」

丹の目は既に濡れていた。そして荊軻に対して恭しく頭を垂れた。こつして彼は刺客になることを了承した。丹はすぐに彼を上卿に迎え、屋敷を与えた。そして彼に御馳走や美酒、美女を贈った。彼に期待しているからだ。

だが荊軻はその生活を楽しむだけであつた。腰を上げようとはしなかつた。

その間に秦の侵略の手は迫つていた。遂に趙を滅ぼし燕の国境に迫つていた。それを見た丹は危機を覚え荊軻の屋敷に向かつた。

「荊軻殿」

彼は慌てた声で荊軻に対して語りかけた。

「遂に秦が国境まで迫つて来ました。最早一刻の猶予もないかと存じます」

「そうですね、いよいよ」

だが荊軻は冷静なままであつた。

「ではそろそろ動く時ですな」

「おお」

丹はそれを聞いて思わず喜びの声をあげた。

「秦王は用心深い。これは以前にもお話しましたな」

「はい」

丹は答えた。

「余程のことがない限り近付くことは出来ませぬ。しかし今ならば降伏の使者として近付くことが可能です」

「あつ」

丹はその言葉にハツとした。

「そして殿下にお見せしたいものがあります」

そう言いながら立ち上がると奥から一つの箱を持って来た。

「それは」

「はい」

荆軻はその箱を開けた。その中には一振りの小さな剣があった。  
「秦王の側には剣を持って近付くことは出来ません。しかしこの剣  
ならば隠す事が出来ます」

「服の中にですか」

「いえ」

荆軻はそれには首を横に振った。

「巻物の地図の中に隠そうと考えております。おそらく服も事前に  
調べられるでしょう」

「確かに。あの男は実に用心深いですからな」

「これならばまさか隠しているとは思いませんまい。そしてこれで秦  
王を刺します」

「成程。それはいいですな」

「はい。ですがまだあります」

「それは？」

「この剣に毒を塗るのです」  
「毒を」

「そうです。それならばほんの少しの傷で殺すことが可能です。万  
が一外されたとしてもかすり傷さえ与えることができればそれで事  
は成ります」

「素晴らしい、そこまで考えておられるとは」

丹は荆軻の周到さに思わず感嘆の言葉を漏らした。

「ただ一度試してみるべきかと」

「試す」

「はい、一度死刑囚を使ってお試し下さい」

「わかりました」

こうして剣に毒が塗られた。これも荆軻の持っていた毒である。  
それが塗られ死刑囚の身体にかすり傷をつけた。その死刑囚はそれ  
だけで息絶えた。

「これで剣はよろしいですな」

話を聞いた荆軻は満足そうにそう言った。

「後はこれを隠す地図です」

共にいた丹に対して言った。

「それなら燕の南の地図がよろしいのでは。丁度秦王が狙っている場所です」

「そうですね」

荆軻はそれに頷いた。

「ではそれでいきましょう」

「はい」

「ですがまだ必要なものがあります」

「財宝と地図の他にもですか」

「はい、秦王が必ず跳び付くものです」

「秦王が」

丹はそれを聞いて首を傾げた。この二つで充分ではないかと思えた。だが荆軻の考えは違っていた。

「首です」

「首!？」

「そうですね、樊於期將軍の首です」

「えっ!」

丹はそれを聞いて思わず声をあげた。

「樊於期將軍の首ですか」

「はい」

荆軻は冷酷ともとれる醒めた声で答えた。

「秦王が出て来るとなればこれは必要であると存じます」

「しかし」

見れば丹の顔は青くなっていた。

「殿下」

だが荆軻はそれに躊躇することなく言った。

「將軍にどれだけの賞金がかけられているか、ご存知でしょう」

「はい」

彼は力なく答えた。樊於期には金千斤と一万戸がかけられているのである。破格の懸賞であった。

そして何よりも秦王は彼を恨み続けていた。虎狼の心を持つとまで言われた彼は樊於期に諫められたことを恨みに思っていた。絶対的な独裁者にとって諫める者は不要であったのだ。

彼は一族を殺され燕に逃げ延びてきているのだ。そして丹が彼を匿っているのだ。

「荆軻殿お待ち下さい」

丹は彼を止めにかかった。

「將軍は私を頼って来られました。そのようなことはとても出来ません」

「しかし」

だが荆軻もこれは譲れなかった。

「どうかここは他のことで済ませて頂きませぬか。これは心からのお願いです」

荆軻はそれに対して苦い顔をした。だがどうにもなるものではなかった。丹の心が硬いのは明らかであった。

彼はそれを察しその場は退いた。だがその足で樊於期の下に向かった。

「將軍はおられますか。荆軻という者ですが」

「荆軻殿が」

彼は丹の客人として知られるようになっていた。樊於期はそれを聞いて門に姿を現わした。

「おお、貴殿があのだ。荆軻殿ですか。お話は常々聞いております」

「はい」

荆軻はそれを受けて礼を返した。だがその顔は笑ってはいなかった。

（むっ）

樊於期はそれを見て何かを思った。だがそれは顔には出さなかった。

「お話ししたいことがあるのですが」

荆軻は顔を上げて彼に言った。彼はそれを受けて荆軻を屋敷に導き入れた。

自室に案内する。そこには机と書物が数冊あるだけだった。武人らしく質素な部屋であった。

「どうぞお座り下さい」

「はい」

二人は向かい合って座った。樊於期はそこであらためて荆軻に尋ねた。

「してお話とは何でしょうか」

「はい」

荆軻はそれを受けて話をはじめた。

「秦についてですが」

「秦」

それを聞いた樊於期の眉がピクリ、と動いた。

「あの国の法はあまりにも惨いものがあります」

「はい」

樊於期がそれに頷かない筈がなかった。これは読み通りであった。

「些細なことで惨い刑罰を課し、それは一族郎党にまで及びます。」

またその追及も執拗で將軍にもかなりの懸賞がかけられております」

「その通りです」

樊於期はそれを受けて応えた。

「今もそれを思うと痛みが骨にまで滲みるようです」

「骨にまでですか」

「はい」

彼は答えた。

「この恨み、何としても晴らしたいのですがそれも適いません。口惜しさだけ噛み締める日々です」

「左様ですか」

荆軻はそれを受けて頷いた。

「その心、お察しいたします」

「はい」

彼はそれに頷いた。

「ですがそのご無念、一つだけ晴らす方法があります」

「本当ですか!？」

樊於期はそれを聞き思わず身を乗り出した。

「それはどの様なものでしょうか」

「燕の憂いも、將軍の仇討ちも出来るものです」

「その様なものがあつたのですか」

彼はそれを聞き曇りの中から白日を見た様な顔になった。

「それは一体」

「將軍」

荊軻はここで声も顔を引き締めさせた。

「御命を捨てられることは出来ませんか」

「命を」

樊於期はそれを問われても動ずるところがなかった。

(よし)

荊軻はそれを見て内心会心の思いであつた。

「そうです。そのお覚悟はありますか」

「.....」

彼は暫し答えなかつた。だがやがて口を開いた。

「荊軻殿、私は武人です」

彼は言った。

「ましてや失うものなぞもつない。今更命を惜しんでどうしましよ

う」

「その言葉、偽りはありませんな」

「はい」

彼は強い声で答えた。

「私を匿ってくれた燕の為、そして仇討ちの為ならこの樊於期喜んでこの命を捧げましょう」

「わかりました」

荆軻はそれを受けて頷いた。

「それではお話ししましょう」

そして彼は秦王暗殺計画について話はじめた。話が終わると彼は樊於期をさらに強い目を見た。

「この様に將軍の首が必要なのです。お解り頂けたでしょうか」

「はい」

彼は快く答えた。

「私の首一つでそれが成るのなら何と安いことでしょう」

「そうですね」

だが荆軻はその言葉に哀しい陰があるのを見逃さなかった。だがそれを表に出すわけにはいかなかった。

「それではお願いします」

そう言つて頭を深くと下げた。樊於期はそれを微笑んで受けた。

「それではお待たせするのも失礼ですから」

すぐに立ち上がった。後ろに置いていた剣を手にする。

「この首、存分に使つて下され」

そう言つと首を掻き切つた。そして血の海の中に倒れた。

「……………有り難うございます」

荆軻は彼の亡骸に対して礼をした。そして共の者を呼んだ。

「將軍は自害された」

「えっ」

それを聞いた共の者は思わず声をあげた。

「立派な最期であつた。だがまだやるべきことがある」

「それは」

「將軍の首を塩漬けにせよ。そして丁重に弔うようにな」

「わかりました」

共の者はそれに応えた。こうして樊於期の首は塩漬けにされその遺体は丁重に葬られた。そしてその後で丹に伝えられた。

「そうか」

丹はそれを聞いて力なく頷くだけであった。こうするしかないのは薄々わかっていた。だがそれでも彼を殺すことははしなかったのである。自分を頼って来た者を殺すことは彼にはできはしなかったのだ。

しかし事は全てが済んでしまっていた。丹はそれを聞いて覚悟を決めるしかなかったのであった。

荆軻はそれについては何も言わなかった。ただ屋敷に帰り何かを待っているようであった。

## 第四話

全ては整った。だがそれでも彼は動こうとはしない。やはり何かを待っていた。

そんな彼に痺れを切らし丹は屋敷にやって来た。

「荊軻殿」

彼は荊軻と庭で話をした。既に寒くなりだしており木々にも葉は少なくなってきた。空も沈んでいる。

「全て整っております。出られぬのは何かを待っておりますのか」

「はい」

荊軻はそれに対して答えた。

「友を待つております」

「友を」

「はい。手紙をよこしたところこちらに来てくれるそうです。彼が来たならば事は必ずや成りましょう」

「その御友人を暗殺の補佐にするのですね」

「はい」

彼はそう考えていたのだ。

「それで全てが整います。私が動くのはそれからです」

「しかし」

だが丹は焦っていた。彼にとっては一刻も無駄には出来なかったのだ。彼は秦と秦王を心底恐れていた。

「一刻の猶予もありません。秦は既に国境まで迫っているのですぞ」

「それはわかっております」

荊軻は答えた。

「ですが焦ってはなりません。急いで事は仕損じます」

「ですが」

丹の顔が焦燥に支配された。

「いえ」

荆軻はここで語気を強くした。

「私はあの剣一本で秦王の前に向かうのです。失敗は許されません」

「共の者でしたらもう用意しておりますし」

「誰ですか」

荆軻は問うた。

「秦舞陽です」

「あの男ですか」

「はい」

秦舞陽は燕においてはそれなりに名の知られた男であった。

「彼は十三でもう人を殺し、力も肝もあります。彼ならばいいでしょう」

「いえ」

だが荆軻はそれに首を横に振った。

「あの者では荷が重過ぎます」

彼はやや下を俯きながら答えた。

「彼は只の乱暴者です」

「そうでしょうか」

「少なくとも私はそう思います」

彼はあくまで意見を変えるつもりはなかった。

「もうすぐです。その時になったら発ちましょう」

「わかりました」

丹はそれに頷こうとした。だがそれは出来なかった。

「殿下」

ここで燕の重臣の一人が慌てて入って来た。

「どうした」

丹は彼に対して問うた。

「秦が動きました。我が国の国境に向けて大軍を差し向けて来ました」

「何っ」

荊軻はそれを聞いて事ならず、と感じた。

「既に我が軍も兵を向けております、ですがやはりその差は覆せません。このままでは苦戦は必至かと」

「むむむ」

丹の顔が青くなつていく。そして荊軻に顔を向けた。

「荊軻殿」

「わかりました」

彼は観念したように言った。

「行きましよう、最早考えている暇はありません」

「はい」

彼は観念していても事を果すつもりであった。そう決心して丹に答えた。

こうして彼の出発が決まった。彼は秦に向けて発った。

事情を知る僅かな者達だけが彼を見送りに向かった。当然丹が主である。

皆白装束であった。それは将に死者を見送りものであった。

彼等は易水にて宴の場を持った。そしてそこで別れの杯を交わすことになった。静かな宴であった。

辺りにある草木も殆ど葉が落ちていた。だがただ一つ赤い花だけがそこに咲いていた。

（あの花か）

荊軻はその花を見て心の中で呟いた。彼岸花であった。

（こんな寒いのに咲いているとはな）

彼はそれを見ただけで何か嬉しい気持ちになった。これから死地に向かうというのに自分でも不思議であった。

思えばこの地に来たのもあの花が北に向いてなびいていたからであつた。

（見送りかな。私をこの地へ導いた最後の仕事として）

そう思ったがこの花とはまた別の花だ。あれは衛の国のことであつた。

それでも何故か同じ花に思えた。それが自分でも不思議だった。  
「荊軻殿」

だがここで丹が声をかけてきた。

「あ、はい」

彼はその言葉にはっとして我に返った。

「飲みましよう、最後に」

「わかりました」

彼の他に誰もあの花に気付いていないようである。これは幸いであつたかも知れない。

「では」

彼はそれを受けて杯を上にかざした。丹もそれにならう。他の者もである。

酒を飲み交わした。それから丹が彼に対して言った。

「お別れです」

「はい」

彼等は白い服のまま杯をあける。そして一通り飲み終わると荊軻は立ち上がった。

「ここで詩を一興」

「はい」

別れの詩であつた。一同耳を澄ませてそれを聞いた。

風蕭蕭として易水寒し

壮士一度去かば復たび還らず

「ごきげんよう」

それを読み終わると彼は一同に背を向けた。そして馬車に乗った。馬車は秦に向けて出発した。荊軻は後ろを振り向かなかつた。

丹も他の者も何も言わなかつた。ただ涙を流し荊軻を見送つていた。

彼の馬車が次第に遠くなつていく。そして遠い道の中に消えてい

った。

荆軻は遂に後ろを振り返ることはなかった。ただ秦の方を向いているだけであった。

やがて秦に着いた。彼は早速秦王の側近の一人に近付き贈り物をした。秦王へのとりなしを頼む為であった。

「陛下」

彼は秦王の前で上奏した。

「燕の使者が着ております」

「ほう」

彼は玉座の上からその者を睥睨しつつ問うた。

「燕は陛下を恐れ降伏を申し出てきました。そしてこれからは秦の臣下になると言っております」

「そうか、それはよいことだ」

彼にとってもそれは願ってもないことであった。一兵も減らすことなく国が手に入ればそれにこしたことはないからだ。

「その忠誠の証として燕の南の地図と財宝を献上に参っておりますが」

「よい心掛けだ。褒めてやると伝えよ」

ここで彼は荆軻に会おうとは考えていなかった。彼の読みは当たっていた。

「もう一つあります」

「献上する品がか」

「はい、逆賊樊於期の首でございます」

「何っ」

それを聞いた秦王の声がうわずった。まるで地の底が揺れる様な声となった。

「それはまことか」

「はい。この目で見ました故。間違いありません」

「ふふふ、そうか」

彼はそれを聞いて笑った。

「どうやら燕も慌てているようだな。だがこれはよいことだ」  
彼は低く笑いながらその側近に対して言った。

「よし、その使者に伝えよ」

「はい」

「予が直々に会うとな。最高の礼を以って迎える。よいな」

「わかりました」

ここで秦王は周りの者に対して言った。

「すぐにその準備に取り掛かるがよい。一国が手に入った祝いでもあるぞ」

「ははっ」

彼等は頭を垂れた。こうして荆軻は秦王に会うこととなった。

秦の宮殿は巨大であった。秦王が天下にその威を示す為に造り変えたものであった。それは将に帝王の城そのものであった。

荆軻はその中に入った。広大な庭の中央に道が開かれていた。

その左右に兵士達が整然と立ち並んでいる。皆武装しその道を守っている。

「強いな」

荆軻は彼等を見ながら呟いた。その様子からこの兵士達がよく訓練された強兵であることを見抜いていたのだ。

馬車から降りた。そして歩いて前を進んでいく。

だが進むうちに共を務める秦舞陽が宮殿と兵士達の威容に圧倒され震えだしてきたのである。

(やはりな)

荆軻の予想通りであった。だから彼は慌てなかった。

「お待ち下され」

ここで庭を守る将校の一人がそれに気付いた。

「そちらの方の様子がおかしいのですが」

「はい」

荆軻がそれに応えた。

「この者は北の辺境の地の者、これまでこうした場所には来たこと  
がありません。その緊張のあまり震えているのでしよう」

「そうでしたか」

「はい」

(この男はあてにはできないな)

荆軻は応対しながらそう考えていた。自分一人でことを為す決意  
をした。

二人は上上がった。そこが本殿であった。

その本殿は極めて広かった。見れば玉座は遙か彼方にあった。

「秦王様です」

その入口にいた文官の一人が彼等に伝えた。

「はい」

荆軻はそれに応えた。秦舞陽を従え前に進む。

秦王は遠くで鎮座していた。左右には秦の高官達が立ち並びその  
脇を固めている。秦王はその中央で豪華な玉座に座り彼等を待つて  
いた。

二人は進む。荆軻は秦舞陽を急かしながら前に進む。

「しつかりせよ」

「は、はい」

だが彼は身体が完全にすくんでいた。荆軻はそれを見ていよいよ  
彼を心もとないと見放した。

(これは役には立たぬ)

しかしそれは最初からわかっていることであった。彼はそれでも  
事を成し遂げるつもりであった。

秦王の前に来た。彼はそこで二人を睥睨していた。

「よくぞ来た」

地の底から響き渡る様な声であった。

「燕からはるばる御苦労であったな」

「はっ」

荆軻は跪き頭を垂れた。秦王は彼に対して言った。

「顔を上げよ」

荊軻はそれに従った。

「名は何という」

「荊軻でございます」

彼は答えた。

「荊軻か。よい名だ」

「有り難うございます」

儀礼的なやりとりをしながら秦王の顔を見る。やはり極めて強烈な個性を感じさせる顔であった。

彫が深く極めて高い鼻をしている。どちらかという和白い顔だ。

眼は青く水の色をしていた。それとは反対に髭も髪も赤く長かった。中原では見られない顔立ちであった。

（秦の血か）

荊軻はそれを見て思った。秦は昔から漢人の血が薄い国とされていたのだ。

それが為に色々と軽蔑されることもあった。だがそんな彼等も今やこの天下で第一の国となっている。それが動かせない事実であった。

そしてこの秦王の力も動かせない事実であった。今天下は彼の手の中に収まるうとしているのだ。

（そうはさせぬ）

荊軻は心の中で呟いた。そしてそこで刃を抜いた。

「荊軻よ」

秦王は彼に対して声をかけた。

「貢ぎ物はどれだ」

「はっ」

彼はそれに従い手に持っていた箱を前に出した。そしてその中を開けた。

そこには樊於期の首があった。塩漬けにされたものである。

「うむ」

秦王はそれを見て満足そうに頷いた。  
「皆の者」

そして左右の廷臣達に向けて言った。

「予に逆らう者は全てこうなる運命である」

やはり重く低い声であった。荆軻はそれを聞きまらずは地響きを思い出した。

（似ているな）

まさしくそうした声であった。彼はその声に恐ろしいまでの威圧感を感じていた。

その威圧感は声からだけではなかった。秦王はその全身から異様なまでの気を放っていた。まるでこの世の全てを覆わんばかりであった。

（流石だ）

荆軻はそう思った。

（天下を一つにせんとするだけはある）

まさしく王の気であった。いや、王よりも器は大きいかも知れない。彼はそう考えると目の前のこの異様な人物に対して畏怖すら感じた。

だがこの男を今から暗殺せねばならないのだ。彼は抜いた刃を秦王に向けた。

「では次は地図だ」

秦王は首を確認し満足した後で言った。

「見せるがよい」

「わかりました」

荆軻はまた応えた。そして地図を入れた箱を前に出してきた。

「こちらです」

「うむ」

荆軻はその箱をゆっくりと開けた。そして中から一本の巻物を取り出した。

「これでいけます」

彼はその紐を解いた。そしてその中を見せていく。

「燕の南方の地図でございます。我が国で最も肥沃な土地です」

「燕でか」

「はい」

荆軻は声に感情を込めないようにした。そして巻物を進めていく。やがて中から光るものが姿を現わした。秦王はそれに目を止めた。

「ムッ」

しかしそれが何かはわからなかった。一瞬目の錯覚かと思った。

しかしそれは違っていた。

それは小さな剣であった。それを確かめた瞬間に荆軻はそれを手にとっていた。

「秦王」

彼はそれを構えながら前に出て来た。

## 第五話

「御命頂戴致します！」

そう叫びながら剣を突き立ててきた。それは秦王の腹に突き刺さった。

しかし秦王は用心深い男であった。彼は儀礼用の厚い服の下に鎧を着込んでいた。それは用心の為にであったがそれが功を為した。

腹にまでは至らなかつた。彼はそれを受けて後ろに飛び下がった。  
「クツ！」

荆軻は顔を歪めさせた。それを見た秦の重臣達と兵士達が一斉に驚きの声をあげた。

「賊か！」

だが誰も動くことは出来なかつた。突然のことで身体が強張ってしまっていた。兵士達は動こうにも命令がないので動くことは出来ない。王の命がない限り本殿に上がることは許されていないのである。

荆軻はその間にも立ち上がった秦王に迫る。ようやく落ち着きを取り戻した重臣の一人が叫ぶ。

「陛下、腰の剣を！」

本殿で剣を持っているのは王只一人である。秦では王にのみ本殿での帯剣が許されている。王故の特権であった。

だがそれは儀礼の意味もあつた。その為飾りも派手で長くとても実用に適したものではない。咄嗟には抜くことが出来なかつた。

「おのれ！」

秦王は苛立ちを覚えた。だが苛立ったからといってどうなるものでもない。荆軻はその間にも剣を手に迫つて来る。

「お覚悟！」

「又ウツ！」

秦王は本殿の柱の陰に回った。そしてそこを回る。

「させんっ！」

荆軻はそれを追う。だが秦王も必死である。彼とて死ぬわけにはいかなかった。

「陛下をお助けせよ！」

重臣の中の誰かが叫んだ。そして素手で荆軻に立ち向かう。

「邪魔だっ！」

荆軻は彼等を斬りつけた。軽く斬っただけである。

だがそれだけで充分であった。それだけで彼等は倒れていった。

「なっ！」

「毒か！」

重臣達はそれを見て仰天した。それは秦王も同じであった。

「毒！」

脚がすくむ。そこに荆軻が迫ってきた。

事は成る、荆軻はその時そう思った。だがそうはならなかった。

御典医の夏無且が動いた。彼は手にしていた薬箱を投げつけたのである。

「又ッ！」

それは荆軻に当たった。彼は手で防いだが中の粉薬が目に入った。そこに隙ができた。重臣達が咄嗟に叫んだ。

「陛下、今です！」

秦王もそれに応える。だがやはり容易には抜けない。それを見た重臣の一人がさらに叫んだ。

「剣を背負われるのです、そうすれば楽に抜けます！」

「おお、そうであった！」

秦王はそれにハツとした。それを入れ剣を背負い引き抜く。

一気に抜けた。荆軻はようやく態勢を立て直したところであった。  
「おのれっ！」

荆軻に斬りかかる。そして彼の左足を斬った。

それで動きが鈍った。荆軻はそれでも立ち上がるうとするが傷が深くそれは適わなかった。だが彼はそれでもなお諦めてはいなかつ

た。

「ままだ！」

剣を投げた。それで最後の勝負で出たのだ。

それを見た秦王は咄嗟に柱の陰に身を隠した。剣は鈍い音を立ててその柱に突き刺さった。

「まだ動くか！」

秦王はそれを受けて完全に頭に血が登った。そして彼に斬りかかりその感情のおもむくまま斬りつけた。

彼がようやく落ち着いた時には荆軻は切り刻まれ無残な屍となっていた。こうして彼は死んだ。

秦舞陽はその間全く動くことができなかった。やはり彼にはこの大任はあまりにも荷が重かったのであった。

秦王がこれに激怒したのは言うまでもない。即座に燕に兵が進められ丹はその責を問われて殺された。そして燕も滅んでしまった。

荆軻は最後まで信頼できる友人を待っていた。だがそれは遂に姿を現わすことはなかった。もしかすると本当にいたのかも知れない。いなかったかも知れない。それは荆軻以外の誰にもわからない。

だが彼にはもう一人友人がいた。高漸離という者である。

彼は筑という楽器の名手であった。その名は天下に知れ渡っていた。

これを聞いた秦王は彼を呼んだ。そしてその筑を実際に聞いてみた。

「ふむ」

彼はそれを聞いていたく気に入った。だがここで問題が起こった。

「陛下」

彼に注進する者がいたのである。

「あの高漸離という者ですが」

「あの者がどうした」

その者は高漸離のことをよく知っていたのである。

「あの者は荆軻の友人ですぞ」

「何っ」

それを聞いた秦王の顔色が一変した。

「それはまことか」

秦王は問うた。

「はい」

彼はそれに頷いた。

「共に酒を飲み親しく語り合っていた親友同士でございませう。御側に置くのは危険かと」

「間違いないな」

「何故嘘を申しませうか」

彼は自信を以ってそう答えた。秦の法では讒言は死罪である。だが彼はそれをあえて行ったのである。

「わかった」

秦王はそれに頷いた。

「今すぐ調べよう。だがそれが嘘であった場合は」  
「わかっております」

彼は答えた。こうして調査が開始された。

その結果それは正しいことがわかった。周りの者は高漸離を殺す様に進言した。しかし冷酷な秦王も今回は悩んだ。

「殺すには惜しい人物だ」

「何故でございませうか」

「あの筑の音を聴いたであろう」

秦王は彼等に対して問うた。

「はい」

「あれだけの演奏はそうそう聴けるものではない。そなた等もそう思わぬか」

「は……」

彼は音楽も愛していたのである。

「だが予の命を狙っている可能性は充分にある。それは用心せねばな」

だがだからといって警戒を怠る人物でもなかった。

「目を潰せ」

彼は言った。

「そうすれば安心して側に置くことができる」

「はっ」

こうして高漸離の両目は潰された。そのうえで秦王の側に置かれた。

秦王と側近達の危惧は当たっていた。彼は友の仇をとる為に秦王の命を狙っていたのである。

その筑には常に鉛が入れられていた。そして機を窺っていた。

秦王は暇があるとその筑を聴いていた。それ程までに彼の奏でる曲に聴き入っていたのだ。

それが狙いであった。彼は秦王が完全に油断するその時を狙っていたのだ。

その時だった。彼は不意に演奏を止めた。

「む!？」

そして筑を投げた。だがそれは外れてしまった。目が見えてはいなかったからだ。

彼は秦王暗殺の咎で処刑されることになった。最後に彼はこう呟いた。

「荆軻殿、済まぬ」

そして彼は荆軻の後を追った。

荆軻の遺体は最初は晒し者にされ打ち棄てられていた。だが心ある者が密かに拾いそれを葬った。その墓は知る者ぞ知る存在となっていた。

その墓には時折参る者がいた。

「項羽よ」

初老の男の声がした。

「これが荆軻の墓じゃ」

その墓の前に小柄な男がやって来た。

「ここがですか」

その後ろから太い男の声がした。そして天を衝く程の大男が姿を現わした。

威風堂々たる男であった。まだ二十にも達してはいないというのにその気は国を覆わんばかりであった。

「そうだ。あの男を暗殺しようとした男じゃ」

彼は後ろの男に対して語った。

「失敗はしたがな」

「そうですか」

若い男は何の感慨も込めずそれに頷いた。

「無念だったでしょうな」

「だがその心は忘れてはならぬぞ」

「わかつております、叔父上」

彼は前にいる男に答えた。

「我々も秦を倒そうということでは彼と同じですからな」

「その通り」

男は頷いた。

「例え三戸になろうと秦を滅ぼすのは楚だ。わかつておるな」

「はい。そして我が祖父の仇」

「うむ」

男は険しい顔をしてそれに頷いた。

「秦を滅ぼすのは我等でなければならぬ」

「あの派手な宮殿も炎の中に入れて消してやりましょうぞ」

「そうだな。この世には秦は不要」

「そしてあの男も」

二人は強い声で言った。その声には激しい憎悪があった。

「それがわかつておればよい。機が来たならば動くぞ」

「ハッ」

二人はそう言うとその場を去った。その周りには赤い花が咲き誇っていた。

「まだ夏だというのに」

若い男はそれに気がつき目をやった。

「不思議なものだ。それでもこの場によく合っている」

だが彼はこの花を何故か好きにはなれなかった。

「私はひなげしの方がいいな」

それもどうしてかわからない。これはあくまで彼の好みの問題であつた。

二人は墓から去つた。それから暫くして一人の男が墓の前に姿を現わした。

「ここが荊軻の墓ですか」

声も容姿もまるで女性のようであつた。だが彼はまごうかたなき男であつた。

「さぞかし無念であつたことでしょう」

彼は目を閉じそう言った。

「しかしあの男の命、そして秦は私が倒します。御安心下さい」

そして墓に対して深々と頭を下げた。

「貴方のご無念も晴らしましょう。必ずや成し遂げてみせます」

頭を上げた。ふとそこで墓の横にある赤い花に気付いた。

「彼岸花ですか」

それは夏にあの二人の者が見たものと同じ花であつた。

「もうそんな季節になつたのですね」

既に秋となつていた。空は高く青くなっている。

「では私も行きますか」

彼は墓を後にした。そして歩きはじめた。

「使命を果たしに。私は私の天命がある筈ですから」

その後には彼岸花が咲いていた。それは何時までもその墓を包み赤く咲き誇つていた。

彼岸花

2  
0  
4  
·  
1  
1  
·  
1  
5

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3028a/>

---

彼岸花

2008年8月29日17時53分発行